

第4回札幌文化芸術未来会議 議事概要

■日時：令和3年4月26日（月）13:00～16:00

■会場：北海道教育大学札幌駅前サテライト「教室1」

■出席者 委員：

伊藤 千織いとう ちおり／伊藤千織デザイン事務所 代表
漆 崇博うるし たかひろ／一般社団法人A I Sプランニング 代表理事
大友 恵理おおとも えり／社会福祉法人ゆうゆう 芸術文化推進室 学芸員
尾崎 要おざき かなめ／アクトコール株式会社 代表取締役
カジタ シノブかじた し の ぶ／インタークロス・クリエイティブセンター ディレクター
木野 哲也きの てつや／ウタウカンパニー株式会社 代表
小島 達子こじま たつこ／株式会社 tatt 代表取締役
酒井 秀治さかい しゅうじ／株式会社 SS 計画 代表取締役
関 鎮京みん じんきょう／北海道教育大学岩見沢校 准教授
森嶋 拓もりしま ひろし／北海道コンテンポラリーダンス普及委員会 委員長
山本 雄基やまもと ゆうき／画家

欠席：古家 昌伸こいえ まさのぶ／北海道新聞社編集局文化部長
佐久間 泉真さくま もとまさ／市民委員
八 條 美奈子はちじょう みなこ／札幌フルーツ協会 副会長

事務局：

札幌市市民文化局文化部長 有塚 広之

札幌市市民文化局文化部文化振興課長 木戸 拓史

札幌市市民文化局文化部文化振興課企画係長 高橋 由美子

札幌市市民文化局文化部文化振興課企画係 下山 竜平

傍聴（オンライン）：3名

■議事概要：

1 「新たな文化施策・事業アイデアシート」に関する各委員からの説明

各委員が検討した「新たな文化施策・事業アイデア」について、各委員から説明された。

(1) 伊藤委員

- サードプレイスというのは、働く職場と家庭のほか、もう一つの居場所ということで、自分が居られる場所として使われている言葉。高齢者の居場所の一つ場所として芸術文化を使えたらと考えた。
- アンケートの中で、社会にもたらす効果としてどんなことを期待しますかという設問の中で、人々が生きる楽しみを見出せるというものがあった。一般の方々はその部分がすごく大事だと考えたということ。
- 次に、健康。文化活動は健康にも、コミュニケーションツールとしてもすごくいいので、そこをつなげていけたらと考えた。具体的には、札幌市の中心部のアクセスがいい場所で芸術系や文化に特化したカルチャー教室やクラブなど、箱物ではなく、プログラムとしてやるのはどうか。また、多世代が入ってくれるような面白い感じのコンテンツを考えてはどうか。
- 講師は札幌市内の文化芸術関係者の若い方。実際、教えることと制作を一緒にやっているというのが札幌の実態としてあることが見えてきたので、そういう人たちの収入のサポートになるようなシステムにしていくのはどうか。
- それから、管理者が来て、こんにちほと言う人がいるような運営の仕方がいいのではないかな。そういう柔らかい感じのカルチャー教室みたいなものをやってはどうかと考えた。

(2) 漆委員

- コロナによって、もともとあった色々な課題がコロナで顕著に出てきた。コロナだからというよりは、もともとあった芸術文化活動への支援やサポートがもうちょっときめ細かいものになっていけばいいと思う。
- 一つ目は、アーティストの創作のプロセスに関するサポート。札幌市内では文化施設がある程度充実しているが、生み出すプロセスがないと作品は生まれない。そのプロセスをきちんとサポートできる状況をつくりたい。これは目には見えない部分になってくるとは思うが、意欲的に活動していこうとする方たちに手だてを取れないかということ。
- 例えば、年間で5組から10組くらいのアーティストを支援できるといい。生活費というよりは活動費の支援が一つあり得る。
- ただ、重要なのは、アーティスト単体ではなく、そのプロセスを支える様々な動きに対し、社会と接続をする、他者と接続するなどといったマネジメントに対しても併せてサポートされる状況が望ましい。
- 二つ目はアーティストの活動フィールドの拡張。既存の文化施設などではない場所、もともとアートのためにしつらえられた場所ではないところで積極的に創作活動が展開されることがこの数十年でもある。
- ただ、助成金や補助金のラインナップを見ると、想定外の場所で行われるものが想定されにくいところがある。新しいフィールドを開拓していく活動に対してきちんとサポートできるよう

な取組をしていければいい。個人よりは、事業やプロジェクトなど、少し大きな規模でサポートできるという。

- 最後につながるサポート。アートと社会をつなげていく人材が足りておらず、それを解消する必要がある。フリーランスでコーディネートをする方やそういった機能を持っている団体に支援をして、全体的に多彩な芸術活動が活発化していく状況がつかれないかと考えた。

(3) 大友委員

- 一つ目は、空きビル提携事務所サポート、コロナ対策。今年度も状況があまりよくなっていない中、芸術文化関係の方々が活動をどうやったら維持できるのか、事務所のランニングコストが非常に大きな負担で、それを事務所レベルで支援できないかということ。
- ビルを何らかの形で借りるなりしてサポートする。コロナ対策の応急措置については1年くらいと考えたが、今、まちなかは再開発が進んでいる状況で、そこに芸術のクラスターをつくったら面白いのではないかと思う。
- もう一つは、絵画と造形教室等の情報リスト作成。札幌市のような公的機関で情報提供するのがいいのではないかと思う。

(4) 尾崎委員

- 提案は、この会議で提案された一つ一つの事業を実際に推進していく事業体、組織体の再編的なもの。
- 現在の札幌における文化芸術にかかる予算の大半は施設管理などに割かれている。施設を持っている以上はかかってしまうものだと思うが、そういった施設での事業においても専門家がいないうちで行われているなど、ニーズとマッチしていないところがある。
- また、札幌市は、色々な事業に予算を割いて、色々なことをまちとして発信していると思うが、文化芸術団体や個人への直接的な支援が少ないのではないかと思う。
- そこで、札幌市において活動する文化芸術に関わる全ての人や施設が対象となる新しい札幌スタイルのアーツカウンシル事業とした。
- 市内における文化施設維持管理費用と事業費用を分割し、事業費用をそこで一括して采配を振る。札幌市文化局は、文化を活用し、どういったまちにしていくのか、住む人たちがどういう暮らしをしていくのかという理念的なことを行い、実際にそれらの事業を行うのはアーツカウンシルという、新たな組織体に再編してはどうか。その組織では、事業部門と助成部門、それらを評価する部門をつくり、個別の事業を同じように行い、それらの事業を評価していく。また、個別にアーティストを支援するなど、そういった形はどうかと考えた。

(5) 木野委員

- 助成金の新設の提案として考えたのが、札幌市文化芸術多面的機能創出推進事業。
- 札幌市が課題に思っている、文化芸術で足りないと思っているものに対して公募をかけ、それを解決してくれる個人や団体を対象とする。

- 募集する事業企画は、一つ目は芸術文化による多様な価値創造及び国際発信力、二つ目は市民の芸術文化への参画機会、芸術体験の機会をつくる、三つ目は芸術文化による分野横断ネットワーク形成に向けた創造活動、四つ目は人材育成。
- これで第2次まちづくり戦略ビジョンの柱としてはどうか、市としても、文化部の一事業ではなく、格上げした施策にできないか。アーティストが食えていない状況を打破していく。アートで食えないまちというところに光を当て直すということ。
- 学生やゼミの研究グループ、保育園や幼稚園の先生方、福祉施設の方々など、そういう人たちの企画も取り入れられないか。先進的だが、この姿勢自体に行政がかなえない共生の道筋があるのではないかと思う。
- そして、評価、検証。予算を使うものは、こういうものをやりましたというようなお披露目的な形になり、そういうところに予算がつくが、そうではなく、道筋を評価しながら進めていく。つまり、市民と役所がゼロイチでつくる、共創するというやり方ができないか。
- 予算イメージは、市民活動に10万円ではしょぼいと思っていて、合計1.3億円くらい予算感だと思う。
- これをかなえる事務局も横断的であるべき。結果的に市役所にもノウハウが残る。
- 最後に、別枠で、アーティスト個人の作家活動を支えるのに150万円くらいを出し、年間2名ほど、研修リサーチや海外に行ったり、アウトリーチとか、分野横断をしたり、必ず成果展をやらなければいけないということに縛られなくてもいいのではないかとということも考えた。

(6) 小島委員

- まちにアートというものがどれだけ見えているのだろうかということ考えた。一般の方々アートを意識する機会がどこにあるのだろうかと考えたとき、まちにもう少しアートがあればいいと思った。芸術祭など、イベントレベルのものはあるが、これらは時期的なものであったりするので、常時あるものにできないか。
- アーツカウンシルについて、それが究極目標なのかどうかは分からないが、アーツカウンシルに向けた準備は必要。
- それから、今あるもの、過去の事例について反省と振り返りをして、それをブラッシュアップしていく。補助金も含め、切実なもの、近々に必要なものから攻略していくのがいい。

(7) 森嶋委員

- 事業評価や制度評価を外部の方をお願いすることが大事。市民の声を聞くのも大事だが、札幌市内の団体や北海道外の方に事業評価をしてもらおう。それを発表することで、市民が知る機会になるし、外部の人からの見られ方も分かり、皆がレベルアップできるのではないか。
- SCARATSのアートセンターや大通情報センターなどの機能や現状の見直しも必要であり、これについても、市民の声や芸術団体の声、外の人が必要。
- また、大通情報センターのイベント情報の発信方法は本当にこれでいいのか、そういうところ

への予算をもう少し厚くできればいい。新しく何かを始めるといのもいいが、既にあるものをもっとよくすることに力を入れていけたらいいと思う。

○札幌圏を巻き込んだ文化構想みたいなものがつくれないか。多分、札幌圏でいうと250万人くらいの人口規模になると思う。ほかの部署の補助金関係では札幌圏の何かというものをたまに見るが、文化芸術ではあまり聞かない。将来に向けたスタートミーティングがあるといい。30年後くらいの感覚。

○助成の制度設計。難易度の低いものから高いものまで、ステップがあるといい。主催事業を対象とした助成ばかりで、地道なステップを対象とした助成がないとお客さんも人材も育たない。

○それから、中間支援組織への補助、助成等があるといい。札幌市だけで色々なことを主催するには限界があるので、民間団体をもっと信頼していただきたい。行政からアーティストに直に行く助成は結構あるが、プロジェクトをつくっていくのは中間支援組織。アーティストが自ら企業と何かをやるというのは無理があり、コーディネーターみたいな人が必要。アメリカでは、国や州がNPOに予算をどんと振って、NPOからアーティストに再分配するみたいなことをしており、そういうやり方もある。一つを挟むことで柔軟性を持たせることができる。

(8) 山本委員

○アンケート結果やまちづくり戦略ビジョンを見ると、アートがポジティブな要素で書いてある。利用できそうだから、それを使っていこうみたいな、そういうマインドセットをまち全体で変えたい。アートには、社会に全く役に立たなかったり、逆に人に不快感を与えてしまったり、誰にも求められないものを黙々とやるような要素もある。アートを役に立たせようとするあまり、そういったアートの影の部分を排除してしまっているのではないか。アートの多様性を保護、尊重することで、社会包摂の理解があるまちという印象をつけたい。それを前提に施策のアイデアを出した。

○札幌市では、京都に比べ、専門の人がかなり少ない状況であり、そういう意見が反映されていないのではないかという心配がある。アマから専門家まで、幅広い支援が必要だが、同じ支援ではなく、それぞれのランクに対応した支援が必要。

○そういった前提を意識した上で、施策のアイデアを検討した。

- ・制作プロセスなどを対象とした用途を定めない助成や中堅以上のキャリア作家への助成。
- ・空きテナントや、古くて家主が困っているような物件の集中的な買い上げ等による活動スタジオなどの提供や助成。エリアを一緒にして、アーティストビレッジのような、変な人がいっぱい住んでいて、結果的にそこが観光地になるみたいなこともあると思う。
- ・教育機関へのアーティストの生活理解プログラム。アーティストの生活実態について、教育現場を利用して理解を促すみたいなこともできるのではないか。
- ・創造的アイデアと、技術を持つ企業や高齢者などとのマッチング機会。特殊技術を持つ一般の企業や個人とクリエイターとのマッチング機会をつくる。

- ・芸術分野で批評、評論、研究が必要だという声が多いので、札幌でやっているイベントの批評をコンペで募集し、それにお金を出すなど。
- ・地方都市と文化芸術の雑誌やテレビなどのメディアとのコラボレーション。
- ・既存の文化施設の編成。
- ・(地元以外のアーティストと) 地元アーティストとのレベルを調整するということにも意識が向くような助成のシステム
- ・文化部やアーティスト、地元の学芸員等に専門的な取材の時間を設ける。
- ・アーツカウンシルの設立に関すること など

(9) カジタ委員

- 他委員の意見を聞いた感想となるが、木野委員の助成金のシステムは非常によいと思う。こちらからは課題を提示し、解決案をアイデアとしてもらう。こうすることで関わりが増えていく。また、課題に対し、限られた人数で考えるところから一步抜き出ることができる。さらに、これが継続事業としてなり得る形になっていければ、その立ち上げに対する助成のような感覚でやれると思う。
- 伊藤委員の高齢者に対する施策について、コロナもそうだが、高齢者の行き場のなさということはある。人と交われる空間、やり取り。そこに対して何かできることはないかと思う。
- リストの作成は難しい。行政がやる場合は全部を載せなければいけないなど、平等性みたいなことが入る。そこは中間助成のような、課題解決方法から提示させるというような形で、そういうものが上がってくれば、行政がやる形ではなくとも何らかの施策が打てるようになっていくのではないか。
- マッチングに関しては、リストから単純に声をかけるだけでは解決しない部分が非常に多く、専門家がどうしても必要になる。ただ、その専門家を内部に抱えるのかということ、それもなかなか難しい。そういう人たちを外部で持てるようなシステムをつくとよいと思う。
- コロナについて、日程が決められず、決めたとしてもいつ中止になってもいいというような状態でやらなければいけない。東京がそうだが、イベントは無観客でみたいな、それは意味があるのかみたいな感じになってしまう状況で何がよいのか。ただ、これが続いていくと疲弊し、企画をしなくなるので、そこに対する何かができるとういと思う。
- 実施するというゴールに対する助成ではなく、企画することをゴールとする形のものであってもよい。助成金は多くて2分の1や3分の2でだが、物によっては全額助成があってもよいと思う。

(10) 各委員からの意見のまとめ (関委員長)

- まず、多様な活動を支える基盤をつくらないといけないという意見があった。多様な支援というのは、成果に対しての支援、あるいは、そのプロセスや立ち上げに対する支援も必要である一方で、それを動かすアートマネージャーやコーディネーターなども育てていかないといけない

いということがあった。

- 活動する場所も、文化施設に限らず、まちなかで活動ができることにより、今までアートが浸透しなかった場所に接続することで文化芸術の役割も広がっていくと思う。
- 多様な支援をつくるには、行政の中で考えるだけでは若干限界があるのではないかと、専門性を持っている組織をつくるべきだという意見や支援組織だけではなく、評価制度についても検証していくべきという意見があった。
- 高齢者が行き場をなくしている状況の中で、高齢者の文化芸術を楽しむ場をどう創出していくのかということがあった。
- 同時に、コロナ禍において文化施設が閉鎖されたり、文化活動が縦断されたりしているので、一番心配なのは子ども。文化芸術を享受する、楽しむ場が非常に奪われており、そうした子どもの文化的権利を誰が保証していくのかということがある。それは教育現場となるのかと思うが、子どもと教育現場、そして、それがアーティストの雇用問題につながる。3者で文化芸術をもっと拡大していくきっかけになると思う。

2 グループワーク及び発表

委員を三つのグループに分け、グループごとに下記テーマのうち一つについて検討し、検討結果に関して各グループの代表者から発表を行った。

「アーティストや団体に対する助成や支援の在り方について」

「社会課題への文化芸術の関わりについて」

「行政と民間団体との間に入る組織編製の在り方について」

(1) 「アーティストや団体に対する助成や支援の在り方」に関するグループ発表（漆委員、木野委員、山本委員）

- 最初に、創作プロセスをきちんと支えていく仕組みがあったらいいという話になった。
- アーティストだけではなく、コーディネートやマネジメントに関わる人たちも同じように支援できないかという意見がある中で、そもそもアーティストに対しての支援が足りないといった意見もあったことから、コーディネートやマネジメントは一旦置いておき、純粋にアーティストの活動をどう支援するかという方向性で、中堅キャリアのアーティストを中心にサポートできる仕組みがつかれないか話し合った。
- アーティストがキャリアを積み上げていく段階に関し、若手だけではなく、中堅、さらには、ベテラン勢もステップアップができる仕組みを札幌でつくれたらいいというもの。
- さらに、札幌に住んでいるアーティストと札幌の外から来たアーティストが積極的に関わり、共に創作活動に励めるような環境をもっとつくれたらいいという方向性となった。
- アーティストには純粋に作品をつくりたいという人もおり、アーティストのキャリア形成につながる支援というのは、必ずしも札幌市が抱える課題と関係するものではないという話があっ

た。

- 一方、別枠で、事業に対してアートを活用する、アートを手法として使うなど、教育や福祉など、いろいろな分野の人たちが参入できる受け皿となるような支援と、支援を大きく二つに分けることができるのではないかと考えた。
- 一つの制度とするのか別々の制度とするのかは今後の検討次第だが、いずれにしても専門的な知見を入れ、きちんとしたジャッジが働くような仕組みをつくっていかねばいけない。
- 最後は、こういうものを支援する大もとになる組織について検討し、実務を担う組織には、様々な専門家の協力やそのマネジメントが必要なことから、外部の人材も入れるべきと考えた。
- これについては、アーツカウンシルという構想の中で実現していくのか、市職員と外部のマネージャーがセットで事務局という形にするのか、さらには、SCARATSのような組織と市の文化部と別の人たちがセットになったコンソーシアム的な組織をつくることもあり得る。

(2) 社会課題への文化芸術の関わりについて（伊藤委員、カジタ委員、森嶋委員）

- 高齢者や教育に注目したとき、高齢者向けの教室など、いろいろと考えることはできるが、実働できるのか、また、社会課題について、アーティストやプレイヤーがここに対して何かの働きかけをする機会が多いかということ、圧倒的に少ないのではないかという意見が出された。
- これを考えていくと中間支援組織の話になっていき、もしかしたら、今重要なのは、コーディネートや企画、マネジメントをする人たちの不在という問題なのではないかとなった。
- リストをつくったほうがいいのかという意見も出されたが、リストを高齢者施設が使うかということなかなか使えない。こういうものをつくっても、やはり、その情報をうまく生かす人たちがいなければいけない。
- 今、コーディネートやマネジメントする人がいないのは、お金にならないからということが結構大きい。例えば、紹介の依頼がボランティアになってしまうということも多い。だから、社会課題に対し、こういうプレイヤーを使うような企画に対して助成するということは、一つの方法論として、走り出しとしてあるのではないか。
- 現状、社会課題と文化の担い手のつなぎ手がない。例えば、高齢者施設で演劇をやるとなったら、場合によってはお金になるが、つながりがないため、企画も生まれにくい。そうであれば、そこに対して何らかの助成なり育成なりを考えないといけない。ここが分断されており、社会課題と関わることもなく、それぞれが進んでいるという状態。
- それから、情報に関し、施設間連携は今見ている限りバラバラ。各施設がどういう趣旨で、どういう立ち位置でやっていくのか、ちゃんと施設間連携を取った方がいいのではないかという意見があった。

(3) 行政と民間団体との間に入る組織編制の在り方について（大友委員、尾崎委員、小島委員）

- 現状、何となく見え方として、まず、札幌市があり、文化部があり、（それらと紐づく形で）SIAFがあり、PMFがあり、サッポロ・シティ・ジャズがあり、教育文化会館、芸術の森が

ある。

- いろいろな課題を解決するために、札幌市の下にカウンスルと施設運営を置き、その二つに分けてしまっただろうか。
- カウンスルの下に、その肝になる評価部門や助成部門、事業部門があるイメージ。(事業部門の下には、PMFやサッポロ・シティ・ジャズ、芸術の森で行っている事業や教育文化会館で行う事業がある。
- 助成部門の中には、アーティストに行くものや課題を解決していくものに対して助成をしていくようなものがある。
- 評価部門は、事業評価も行えば、助成に関する評価も行っていく。
- 今までは、組織体制として、こちらの(カウンスル内にある部門)人が、明日からはこちら(施設運営)に来て、その逆があつてという感じ。ここに専門性をもう少し持たせることが必要なのではないか。そのためにはこういう仕組みが必要なのではないかということをお話した。
- 欲を言えば、(カウンスル内の)どこかの部門で、例えば、民間のお金を集めてくるような組織を置き、そこから(アーティスト等に)分配してはどうかということも考えた。アーティストやその組織というのは小さく、助成金を取るのは大変。そのため、そういう役割がここにあつてもいい。
- こういう仕組みが必要な理由は、いろいろな案があつても、結局それを誰がどう進めていくのかという問題になるから。それに、今はその進めていくための組織体が脆弱なのではないかと考えた。

【「行政と民間団体との間に入る組織編制の在り方」に関する質疑応答】

- 森嶋委員 今、アーツカウンスルは札幌市芸術文化財団が担い、助成は北海道文化財団が担っている。評価の部分はないと思うが、その辺をどう思うか。
- ⇒尾崎委員 評価に関する詳細まで議論できていないが、評価をする以上、そこに対する知見や専門性はどうしても必要になると思う。
- 森嶋委員 既にある団体を活用していくのか、それとも新たにつくるのか。
- ⇒尾崎委員 そこは札幌市と未来会議で議論をしていきたい。
- 森嶋委員 個人的には、アーツカウンスルという組織が全部を担うことによって巨大組織になり、危うさが多少あると感じている。そこが民間団体に寄り添った活動をすればよいが、そうではない可能性もあり、メリットとデメリットがあると思う。

3 次回に向けて(酒井副委員長)

- 今後、未来会議の提案を戦略ビジョンやアクションプランに紐付けて施策を体系立てしていくにあたり、目標と、それに向けた施策の位置づけが見やすくできるようなものをつくることを未来会議の宿題にしたい。

- また、頭に入れておく程度でいいが、他の自治体の先進的な取組事例があれば提示してほしい。
- 特にアーツカウンシルについては非常に長期的な取組となるのかもしれないが、今まさにコロナ禍で緊急的に打っていかねばいけない短期的な支援策についてのアイデア出しをしたい。第5回はそれらを議論するように組み立てていこうと考えている。